

戸定会会報

〈千葉大学大学院園芸学研究科・園芸学部〉

CONTENTS

特集「アカデミック・リンク松戸」..... 2

会長ご挨拶	6
名誉会長ご挨拶	6
退職のご挨拶	7
新任のご挨拶	8
学科近況	9
国際交流	12
支部だより・同期会	14
令和 2 年度戸定会役員名簿	18
令和 2 年度戸定会理事会総会報告	19
令和元年度決算書・令和 2 年度予算書	20
会員計報	21
令和元年度戸定学術振興委員会事業報告	22
令和元年度寄付者ご芳名	24
卒業生だより	25
学生への就職支援のお願い	26
ホームカミングデー開催の報告	27
園芸学部 あれ！これ！（その 5）	28
寄付のお願い・編集後記	28

2020



アカデミック・リンク募金目標達成のご報告と 芳名簿の作成について

大学院園芸学研究科長 **松岡 延浩**
附属図書館松戸分館長 **小林 達明**
(前大学院園芸学研究科長)

戸定会会長 **加藤 一郎**

拝啓 皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、平成30年度から令和元年度にかけてご協力いただいておりますアカデミック・リンク募金ですが、合計56,766,849円に達し、おかげをもちまして、目標の5千万円を達成することができました。一昨年行いましたクラウドファンディング募金も合わせますと、総計878人の方々から多大なご寄付をいただきました。皆様の温かいご支援に、一同心より感謝申し上げます。

附属図書館松戸分館自体は、昨年11月にオープンし、すでに多くの学生・教職員が利用しており、利便性もよく快適と評判も上々です。現在、寄付金を活用して、緑のテラスをはじめとしたランドスケープ工事を行っており、本年10月末に完成予定です。

11月の戸定祭に合わせて、完全竣工の記念式典を執り行いたく計画を進めておりましたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響を鑑み、学生や学外からのご来場者の皆様の健康面・安全面を考慮した結果、今年度の戸定祭を中止することとし、記念式典の開催については、延期することといたしました。

来年度の会報に寄付者芳名簿を添えて、無事完工したことをご報告する予定です。芳名簿に掲載を希望されない方（個人、法人）は戸定会事務局までお知らせください。

新型コロナウイルス感染症拡大の世情ではございますが、皆様におかれましては、ご自愛いただき、健やかにお過ごしになられますようお願い申し上げます。

敬具



イタリア式庭園から望むアカデミック・リンク松戸

アカデミック・リンク松戸「緑のテラス」の整備工事が始まりました！

アカデミック・リンク松戸緑のテラス周辺ワーキング委員 **木下 剛**

7月に入りいよいよ緑のテラスの整備工事が始まりました(写真1)。9月下旬までにテラス部分の基礎工事や土盛りなどを終え、それ以降芝張り他の植栽工事、事務棟南側の配管埋込などが行われ、本年10月末までに竣工の予定です。テラスの主要部分に変更はありませんが、寄付者銘板を緑のテラスの一部に設置すべく検討を行っています。また、懸案だったレインガーデン(雨庭)の設置場所を、テラスの中から外(現在の道路部分に)に変更しました(図1)。土留めなどの建

設に係る費用を抑えるためです。しかしこの変更により、既存のイタリア式庭園を含め全部で4段のテラスすべてにガーデンが整うことになります(図2)。緑のテラスだけでなく、アカデミック・リンク西側(写真2)および北側のランドスケープ(写真3)も重要です。フォーマルな南側(緑のテラス)に対して、北側は学生や職員の日常的な活動の場となることを意識して、現在検討を進めています(図3)。



写真1 工事中の緑のテラス(令和2年7月16日現在)



写真2 フランス式庭園に面する西側外構

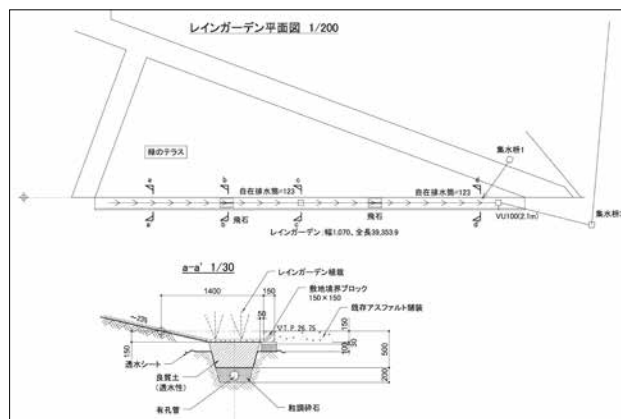


図1 レインガーデン平面図・断面図(検討中)

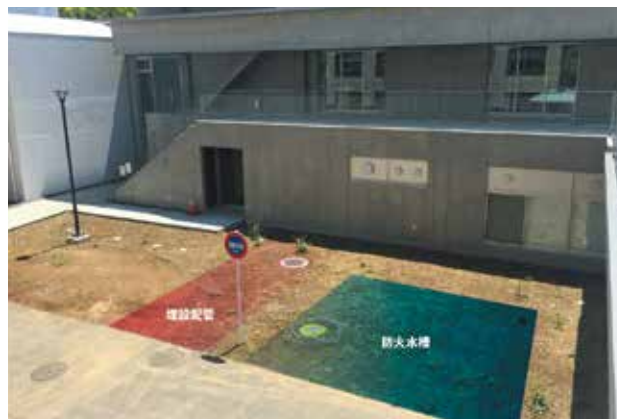


写真3 学生から憩いの場という要望の多い北側外構



図2 イタリア式庭園を拡張した4段のテラス

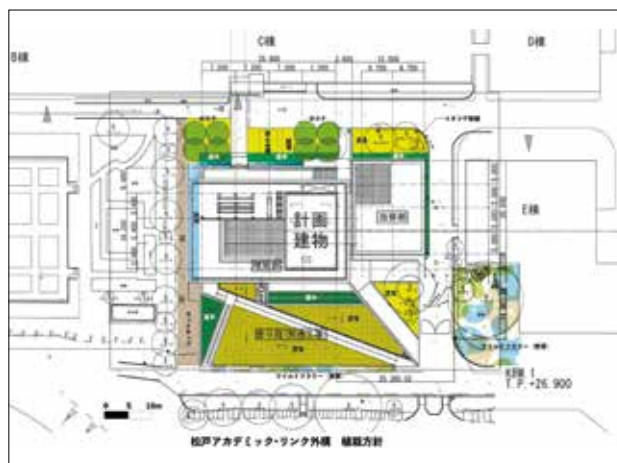


図3 ランドスケープの検討

2019 年アカデミック・リンク松戸の開館後の状況

図書館松戸分館長 **小林 達明**

図書館松戸分館が再開した昨年 11 月以降の利用状況を、データを用いて説明します。旧分館は 2017 年 11 月に閉館していますが、それまで 1 年間の入館者数は 28,571 人でした。比較のために 11 月から 3 月の入館者数を取ると 11,370 人。分館再開から今年 3 月までの入館者数が 14,247 人ですから、閉館前に比べて 25% アップしています。開館直後の集客効果、新型コロナ閉館前の駆け込み需要を考えても、改修によって利用者は確実に増えたと思われます。

一方、11 月から 3 月の貸出冊数を取ると 1,761 冊でした。分館再開から今年 3 月までの貸出冊数は 1,556 冊と昨年より 10% 強の減で、分館改修は貸出には効果が上がっていません。見た目の改善だけではダメで、貸出増加のためにはコンテンツの改善と提供の仕方が大事なことがわかります。

2 階のアクティブラーニングスペースには「研究資料ナビゲータ」と「私の一冊」というコーナーを設けました。前者は学生が学ぶ教育プログラムの推薦図書を教員が選んで配架したもの、後者は教員の心に残る本を紹介したものです。このうち、昨年 11 月から今年 6 月までの研究資料ナビゲータの貸出冊数は 380 冊、この間の総貸出冊数が 2,443 冊だったので、その 15% が研究資料ナビゲータでした。4 月以降、2 階は閉鎖されていますから、3 月まで研究資料ナビゲータの貸出が 20% 以上だったのではないのでしょうか。

アカデミック・リンクを象徴するのは、2 階に設置した学習相談デスクです。ここは、選ばれた大学院生がラーニングサポーターとして着席して、学部生の学習相談に答えるコーナーです。2019 年 11 月から今年 2 月にかけて開催され、計 25 名が色々な大事な相談に訪れています。

このように快調に滑り出し、さらに利用を伸ばしていこうと思っていた矢先、新型コロナの流行で、4 月 8 日から大学の入構制限が始まり、図書館も閉館に追い込まれました。前日まで、緑の見える 3 階閲覧回廊で学生たちが静かに勉強している姿を見ながら、「これをやめさせるの？」と悲しい気持ちになりました。

しかし、コロナ閉館中も図書貸出は継続されました。3 月 4 月は 100 冊前後と利用が減りましたが、6 月は 459 冊と分館再開以降最高の貸出数を記録しました。図書館はデジタル資料の充実を進めており、コロナ期間中、オンライン利用は格段に増えたと思われます。以前は西千葉でしか受けられなかったアカデミック・リンクのサービスも松戸で受けられるようになり、下の写真は、学生の研究を支援する Encourage YOUR Research! のミニ講座の様子です。7 月からは感染に気を付けながら閲覧室を再開しました。新型コロナ流行の障害はありますが、アカデミック・リンク松戸は展開し続けています。



新型コロナウイルスが 我々に伝えたいメッセージ

戸定会会長 **加藤 一郎**

戸定会の皆様にはご健勝にてご活躍のことと存じます。昨年度はアカデミック・リンク松戸募金に多大なるご支援を頂き、「目標額 5,000 万円」を達成することができました。ご協力を頂いた皆様に厚く御礼申し上げます。



本年度は新型コロナウイルス蔓延により「理事会総会」を含むすべての基幹会議を書面で取り進めるという前代未聞の事態となりました。なにぶんにも不慣れなため皆様にはお手数をお掛けしましたが、書面での「理事会総会」を無事終了することができました。この場をお借りして皆様方に重ねて御礼申し上げます。

新型コロナウイルスは大都市部で広がり、東京一極集中など人口の密集は社会全体にとってリスクが高く、分散型国土への転換やコロナ後を見据えた農村地域の振興も課題となっています。先人たちが紡いできた精神性の高い我が国は、いつしか数字を追いかけけるうちに食料自給率を下げ他国に依存してきた現状が、コロナ禍によってより一層明確になり、人の倫理観や価値観を浮き彫りにしたように感じられます。危機に立ち向かうことができる社会を作るには、社会を維持する仕組みを構築しなければなりません。

広井良典前千葉大学教授は「これから私たちが生きていく時代は生命を基本コンセプトにする時代になり、農業そして食に関わる領域は、この生命を象徴的に示す分野に他ならない。」と述べております。園芸学部・大学院園芸学研究科は人類と環境を未来につなぐ「生きる」を支える学問であり、戸定会会員はその実践者とも言えます。昨年からの戸定会の主要課題である「支部活動の活性化」はこのテーマに通ずるものがあります。支部総会もすべて延期となりましたが、支部総会が再開され次第、皆様方と協議したいと思います。

松戸で幼少期を過ごした俳優の山崎努氏は園芸学部の風景を「森に囲まれ花壇があり、その高台から見る風景はこれまで見た国内外の風景と比較して最も美しかった。」とある雑誌に述べられていました。現在、松戸キャンパスの庭園や園場の管理状態も良いとは言えません。在学生の保護者による後援会、教職員の皆様と協力して図書館のアカデミック・リンクを契機に美しいキャンパスを作り上げることができればと思います。

新型コロナウイルス感染症 対策の新学期

戸定会名誉会長・園芸学研究科長 **松岡 延浩**

この4月に小林達明先生の後を受けて研究科長に就任いたしました。新型コロナウイルス感染症の影響のために思いもかけない出発となりましたが、教職員、学生とともに暗中模索しながら未曾有の事態に対処しております。



そのような母校ですが、明るい話題として、昨年11月にアカデミック・リンク松戸（附属図書館松戸分館）が竣工しました。この工事に対するご寄付は5000万円を超え、ひとえに卒業生の皆様のご協力の賜と心より感謝致します。現在、それに付随するランドスケープ「緑のテラス」の工事が進められていますが、この植栽に関わる作業は、卒業生を中心に行っていただく予定です。歴史的な庭園群と並ぶ新しいランドスケープとして10月の完成を目指しています。

学内の状況をお話しします。4月からENGINEプロジェクトと呼ばれる大学院、学部新入生の全員留学制度が始まる予定でした。また、園芸学研究科も園芸科学コースとランドスケープ学コースに改組され、新しい形態の講義も準備されておりました。しかし、感染症対策のため、海外留学延期はどうか、すべての講義がメディア講義（パソコンやスマートフォンで視聴する講義）で実施されています。現在、千葉大学すべてのキャンパスで入構制限が敷かれており、学生だけでなく教職員も基本的に自宅待機となっています。3月以来、教員の指導の下で研究を行う学生しか入構が許されておらず、キャンパスに全く人影がありません。

特に1年生は大変気の毒な状況でした。希望に胸を膨らませて入学したにもかかわらず、自宅待機とメディア授業では、学問以外に必要なことは学べなかったと思います。8月3日からは、入構制限が緩められ、実験、実習などが再開されます。少しでも遅れを取り戻してくれればと思います。感染防止に注意を払わなければなりません、教員としてキャンパスに学生が戻って来るのは嬉しいことです。

このような中、多くの卒業生の方から、生活に困窮した学生に対するご寄付をいただきました。お陰様で、他研究科、他学部にも先立ち、援助をすることができました。他研究科長と話をしたときに、園芸学部卒業生の結束力は違いますねと言われることがありました。そのようなとき、私も卒業生として、戸定会をもっとお手伝いせねばと思います。

退職のご挨拶

緑地環境学科 教授 木下 勇

コロナ禍で最終講義や退職記念の催しが中止延期となり、4月になってからも、自粛で静かなキャンパスに、県外移動ができる完全退去の6月まで、顔を出していました。それゆえ、定年にあたり、ドラマチックな節目の行事もなく、静かに、ゆるやかに、まさに淡々と水の流れるごとく、戸定のキャンパスを後にした感じであります。



思えば、1992年の9月から4半世紀を超える長きにわたっての戸定の丘での教員生活では多くの方々にお世話になりました。戸定会にも外部の講師の講演会謝金、学生の学術発表等、何度かお世話になり、たいへん感謝しております。

定年を迎える4年間は附属図書館松戸分館長として、概算要求から図書館改修の実現、そして竣工と、長年の悲願の実現という一大事業に関らせていただき、それも戸定会のご協力、ご支援があつての賜物とたいへん有り難く思っています。

最終講義でお話したかったことは「チコちゃんに叱られる～大学って何する所?」と、某番組を真似たパロディ仕立てで、会場と対話して考える趣向を凝らしたもので企画していました。編集したビデオも日の目を見ずに終わったことは、学生、OB・OG、教員、そして学長にまでインタビューでお世話になったのにたいへん申し訳ないことと思います。

今、コロナ禍でテレワーク、オンライン会議など空間、距離の制約を超えたITネットワークの時代へと変革が加速することとも言われます。大学もオンライン授業など、キャンパスがバーチャルな世界に変わろうとしているかのようです。しかし、大学の本質はキャンパスという実体の場所にあると私は考えます。

戸定のキャンパスは、100年以上も様々な営為積み重ねの痕跡が残る生きた学びの場であります。例えば旧正門から上がってきた時の正面に見るクスノキの太木は何か問いかけてくるような気配さえ感じます。

さて、「大学とは何する所?」という問いかけに私が出した答えは(ソクラテスの対話のごとく、無知を知る)「対話する所」です。それは人間同士の対話のみならず、植物との対話をも意味します。そういう意味で戸定のキャンパスは他には代えがたい園芸学の対話に相応しいキャンパスなのです。その有り難さは、去る時になって強く感じた次第です。

園芸学部および戸定会がこのキャンパスとともにますます発展することを祈念して、定年のご挨拶とさせていただきます。

退職に際して

食料資源経済学科 教授 大江 靖雄

2020年3月をもちまして定年退職をいたしました。千葉大学園芸学部は、1998年の着任以来22年間、社会人として最も長く在職した職場となりました。日常にお世話になりました食料資源経済学科、園芸学部および戸定会の皆様には、この場を借りてあらためて心からお礼を申し上げます。この22年間は、国内外の様々な分野や年代の研究者の方々との共同研究をはじめ研究活動、学生・院生の論文指導をはじめとする教育活動に没頭できた本当に幸せな時間であったと思っております。



自身の研究テーマである農村ツーリズムの長年の研究成果に関しては、英文書として最後の年にまとめることもできましたので、千葉大学の卒業論文として自身の研究に一つの区切りをつけることができたと考えています。

4月からは、東京農業大学国際食料情報学部でマーケティングの講義を担当しつつ、これまでの研究を引き続き行っていくことになります。コロナ禍の影響で、出勤数日で大学が閉鎖され右も左もわからないうち講義がすべてonline形式での実施となり、その対応に日々追われている毎日です。無意識に千葉大学との相対比較をしてしまうのですが、私立大学では、学生の教育にかなり重点が置かれているのに対して、国立大学では予算や人員の制約が強まっているものの研究環境はまだ優れていると思われます。

千葉大学園芸学部は、研究資質の高い教員、学力に優れた学生や院生、そして有能な事務部門を擁していますが、その中にいるとその恵まれた環境に気づかず、僥倖ながらその高いポテンシャルを十分発揮できていないように感じることも少なからずありました。閉塞感や不確実性の増している今日だからこそ、分野の壁を越えた国内外での共同研究などでブレークスルーも可能ではないかと経験的に感じております。未踏の分野に果敢に挑戦していただき、高いポテンシャルを全開していただくよう皆様のご健勝と千葉大学園芸学部の新たなご発展を心よりお祈りしております。

学科学年毎の幹事の選定と 戸定会事務局への通知のお願い

戸定会副会長 賀来 宏和

戸定会では、情報化時代に対応した会員相互の連絡や在校生との交流の促進のために、会則改定によ

り、メール等に情報の伝達が可能な学科学年別のクラス幹事を置くこととしました。学科学年のクラスによって同級生の同窓会や連絡網などの幹事が決まっている方は、是非、事務局あてにご登録をお願いします。また、クラス幹事が決まっていない場合は、可能な限り、クラスで幹事を決定の上、ご登録にご協力いただけると幸いです。

新任のご挨拶

園芸学科 助教 **吉田 英生**

戸定会員の皆様、お世話になります。吉田英生と申します。私は2019年10月より園芸学研究科 園芸科学コースの生物生産環境学領域 物理環境分野に助教として着任いたしました。2019年4月に他大学に異動された石神靖弘先生の後任となります。研究室は環境調節工学研究室、専門分野は農業環境工学（施設園芸・植物工場）です。本学着任以前は、企業、大学、公設試験研究機関において温室・植物工場における環境制御に関する研究・教育に従事しておりました。



本学では、植物の生育環境を制御して高付加価値植物を省資源、省エネルギー的に生産する研究を進めております。ご存じの通り、植物は環境に応答してその形態や植物体内に含まれる代謝物の質や量を変化させ、遺伝的に同じでも生育する環境が異なれば「本当に同じ品種なのか？」と思うような質的・量的な違いを見せます。植物の環境応答は非常に多様で、植物の持つ潜在能力とその力を最大限発揮可能な環境条件を明らかにすることで、より効率的な生育制御方法や、革新的な植物生産システムの開発が期待されます。当分野は、世界的に著名な古在先生をはじめ、多くの本学関係者がその発展に貢献されてきました。私もその巨人の肩に立たせていただき、さらなる発展に微力ながら尽力したいと考えております。

研究室では、後藤英司教授、彦坂晶子准教授にご指導賜りながら、研究・教育活動を進めております。はじめに書くべきでしたが、私は本学の出身で、両先生は学部・大学院時代にご指導いただいた恩師でもあります。私の形質をととても良く把握されているので、やりづら面もございますが（笑）、旧知の間柄を活かして円滑に研究室の熱量の維持に努めたいと思います。

着任してこの原稿を書くまでのわずか半年間で、新型コロナウイルスの流行により、社会の有様が大きく変わりました。大変な状況が今後も続くと思料されますが、ご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

新任のご挨拶

緑地環境学科 准教授 **竹内 智子**

戸定会の皆様、はじめまして。私は2020年7月より園芸学研究科ランドスケープ学コースの環境造園管理学領域に准教授として着任いたしました。専門分野は、植栽管理、歴史的庭園の復元、都市緑地政策、官民連携政策です。6月末まで、東京都の造園職職員として行政事務に携わり、直近では、東京23区の都立公園・庭園・霊園の設計工事の総括責任者として、小石川後樂園の唐門の復元や、日比谷公園の再生などを担当しておりました。



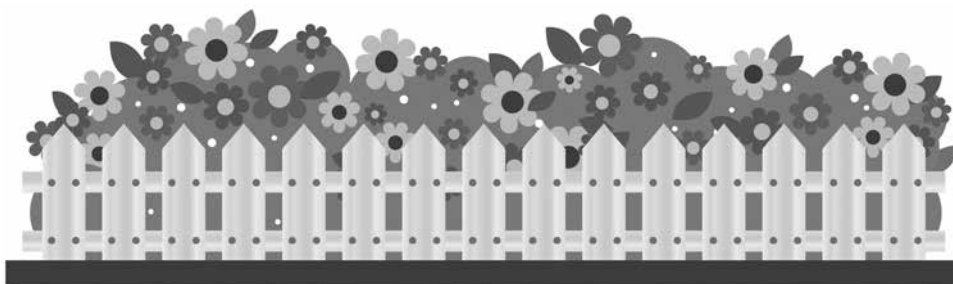
博士研究では、東京23区の外縁部にかつて計画されたグリーンベルト政策が、現在の公園緑地配置に与えた影響を明らかにしました。ロンドンと比べ失敗したと言われていた約80年前の東京のグリーンベルト政策（東京緑地計画）が、現在の大規模公園や住宅団地内の公園、河川沿いの緑地、生産緑地などの残存に影響しており、成果があったことを文献調査とGISの分析により実証しました。

今年6月、グリーンベルトとして位置づけられていた都立高井戸公園を工事の総括責任者として開園させることができ、政策効果を実務上も実証することができました。

千葉大学に4月から新しくできた、私の所属する「ランドスケープ学コース」は実践的な演習を中心に置き、より社会的なニーズが高まっているこの分野の人材育成を行うと伺っています。

歴史的庭園を都市の中でより活かす「文化財庭園都市」を目指し、文化財庭園と都市発展の変遷について研究するとともに、グリーンインフラの社会実装や、明治神宮の森の今後100年のあり方についての研究など、公園や庭園をフィールドにした実践的な研究を進展させていきたいと考えています。学生さんたちとともに、研究活動をするを大変楽しみにしております。

社会の第一線でご活躍されているOB、OGの皆様方には、学生さんたちの育成に関しまして、ぜひとも、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。



園芸学科の近況

園芸学科長 教授 椎名 武夫

園芸学科の近況をお知らせします。令和元年度に学部68名の卒業生、博士前期課程38名、博士後期課程10名の修了生を送り出しました。さらに令和2年4月に学部69名、博士前期課程34名、博士後期課程5名の新生を迎えました。

卒業生の進路は、学部の場合、進学51%、公務員10.1%、製造業8.5%、情報通信業6.8%、学術5.1%、種苗・農業1.7%などとなっています。博士前期課程の場合、進学3.4%、製造業37.9%、公務員24.1%、種苗・農業、建設業、総合サービス業がそれぞれ6.9%、情報通信業3.5%と、ほぼ例年同様です。時代の要請か、情報通信業の増加傾向が見られます。

人事では、退職・転出教員はならず、令和元年10月に生物生産環境学領域にテニュアトラック助教として吉田英生先生が採用されました。環境調節工学研究グループへの所属となりますが、その活躍を期待します。

令和2年4月に大学院の改組があり、環境園芸学専攻の下に、園芸科学コース（園芸学科、応用生命化学科、食料資源経済学科）、ランドスケープ学コース（緑地環境学科）の2コースの構成となりました。園芸学専門分野の深化はもとより、融合理工学府などの自然科学系研究科および環境健康フィールド科学センターと連携した、学際的・総合的教育研究を行って行きます。

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、令和2年度は千葉大学全体でGW明けが授業開始となり、オンデマンド型のメディア授業という形態で授業が行われています。第3ターム開始の8月3日からは、対面授業も開始される予定ですが、感染拡大防止対策として、3密状態を避けるため人数制限を設けての開講となります。これまで学生と教員、学生同士の交流の機会がなく、在校生には不安や不満があるかと思いますが、学生の健康を最優先した対応を行いつつ、徐々にwithコロナの教育研究システムへの移行を図っていくこととなります。

卒業生の皆様におかれましても、コロナ禍の大変な状況でご苦労されていることと思いますが、感染を回避し健康な生活を送られることを祈念いたします。なお、可能であれば在校生への支援もお願いできれば幸いです。よろしくお願い致します。



2019年10月26-27日、森林環境園芸農場（沼田）でのリンゴの収穫・選別の様子

応用生命化学科の近況

応用生命化学科長 教授 天知 誠吾

卒業生の皆様、また保護者の皆様におかれましては、日頃より応用生命化学科の運営にご協力頂き、誠に有り難うございます。

例年であれば、7月のキャンパスは活気に満ちた学生であふれ、夏休みの計画やインターンシップの準備に胸を踊らせている時期です。しかしながら今年度は、新型コロナウイルス感染防止のため、キャンパスは原則立ち入り禁止となり、卒業研究を行う限られた学生が研究室に出入りするのみ、という寂しい状況です。特に、4月に入学したばかりの新生の皆様方におかれましては、まだ一度も大学に登校できず、同級生ともリアルに会えないなか、心身共に大変厳しい状況にあることを、まず心よりお察し申しあげます。特に、地方にとどまられたまま遠隔授業を受けておられる方は、いつになれば上京できるのか、とりわけ不安な日々を過ごされているのではないのでしょうか。そのような不安を少しでも和らげるため、応用生命化学科では5名の教員が、それぞれ6～7人の新生に対して行う遠隔セミナー（応用生命化学セミナー）を5月から開始しました。はじめは慣れない環境で、お互い戸惑いもあったのですが、今では会話も弾み毎回笑いの絶えない楽しいセミナーが実践できています。また7月末には、新生全員をリモートで繋ごう、という少々冒険的な試みにも挑戦する予定です。

新生以外の方々も、第1～2タームの授業は全て遠隔となり、これまでと全く違う授業形態に戸惑われたことと思います。私たち教員にとっても同様で、日々遠隔授業の準備に明け暮れた数ヶ月でした。対面授業のクオリティを落とさずに、どれだけわかりやすい授業をご提供できるか自問自答するなかで、これまでの授業内容を改めて見つめ直す良い機会にもなりました。また、第1～2タームに開催できなかった実験・実習は、夏休み期間中に開催する予定です。マスクの着用はもちろんのこと、体温測定やアルコールによる手指・器具類の消毒、社会的距離の確保など、十分な感染防止対策を講じて実施する予定です。

卒業を控えた4年生のうち、就職される方はほぼ内定が出されたと聞いております。こちらも遠隔での面接など慣れないことが多かったと思います。大学院に進学される方も含めて、残された研究期間は長くはありませんが、高い目標意識を持って卒業研究に進進して頂きたいと思います。



遠隔セミナーの様子

緑地環境学科の近況

緑地環境学科長 教授 百原 新

戸定会の皆様にはいつもご支援をいただき、ありがとうございます。大学院緑地環境学コースは令和2年度よりランドスケープ学コースに改組され、分野横断的な演習型教育も始まり、大学・各部とも全員が留学する国際化プログラムも開始されました。しかし、新型コロナウイルスの影響で様相がすっかりかわってしまいました。5月の連休明けに始まった講義は、すべてビデオ教材等を利用したメディア講義になりました。学生からは、聞き逃したところを何度も視聴できてよい、といった声もある一方、双方向のやりとりがすぐできないもどかしさがあります。セミナーや修士・博士研究発表は遠隔システムを使うなど、従来の教育を継続できるよう、努力を重ねています。8月からはキャンパスでの実習が始まり、お互いに距離をとりながらもメディアではできなかった教育がようやくできるようになります。

緑地環境学科の令和元年度の教員の異動は、木下勇先生（教授）が退職され、加藤顕先生（助教）が准教授に昇任され、3名の客員教員および研究員の先生方を迎えました。また、令和2年7月からは竹内智子先生が准教授として着任されました。令和元年度の学部卒業生の進路は大学院進学が37%、公務員が32%、建設・不動産関係が10%、情報サービス関係が7.3%と、いつものように公務員への就職比率が高い傾向があります。令和元年度の学会研究発表やデザインコンペでの活躍はめざましく、The 2nd BFU International Garden-making Festival, 2019での1等賞など、多くの受賞があります。教員の研究活動では、渡辺洋一先生（特任助教）らによる日本と韓国でのツツジの新種の発表が、新聞で報道されました。

去年の秋には、戸定会の皆様にご支援いただいた、新しい図書館「アカデミック・リンク松戸」が開館しました。現在は周囲の緑の丘の造成が続いています。新型コロナウイルスの影響を受けずに、皆様に新しく整備された松戸キャンパスに来ていただける日が早く来てほしいものです。



北京林業大学にて The 2nd BFU International Garden-making Festival, 2019 の作品とともに

食料資源経済学科の近況

食料資源経済学科長 教授 栗原 伸一

卒業生の皆様方におかれましては、日頃より食料資源経済学科の運営にご協力頂き、誠にありがとうございます。

まず、今年度の入学状況ですが、前期 8.8 倍、後期 11.3 倍という本学部最高志望倍率のなか 30 名が入学しました。新型コロナのために一度も教員と新入生が顔を合わせられていない状況ではありますが、遠隔システムや SNS を活用することで、修学や生活の不安をできるだけ軽減するように努めています（8月から対面授業が一部再開されました）。

人事では、昨年9月末をもちまして加藤恵里特任助教が滋賀県立大学へ異動、また昨年度末をもちまして大江靖雄教授が定年退職いたしました。加藤先生は2015年10月に特任助教として採用されて以来、千葉県の実地に関する調査・研究に精力的に取り組んで来られました。また、学生と一緒に、味噌づくりによる地域興しに参加するなど、大変人気のある先生でした。新天地でのご活躍をお祈り申し上げます。大江先生は在職22年の永きにわたり、研究と教育に邁進され、農村ツーリズムに関する研究で国内外から高い評価を受けるとともに、多数の有望な人材を世に送り出して来られました。今年度からは東京農業大学で教鞭を執られておりますが、本学でもグランドフェローとして、引き続き教育・研究活動に参画していただいております。

研究面では、今年度も国の競争的研究資金である科研費に2件が採択されました。1つ目は、丸山准教授が代表となっている研究で、途上国都市近郊農業の防災面での発展性や効果的な災害リスクの管理方法を探ろうというものです。世界各地で自然災害が増加し、グローバルな協調体制をつくる必要がある中で、このような社会科学研究はますます重要なものになっています。2つ目は、矢野講師が代表となっている研究で、ゲノム編集や植物工場技術に対する人々の理解促進に向け、効率的でわかりやすい情報提供のあり方を明らかにしようとするものです。こうした新技術に対しては、産業界からの期待が高まる一方、誤解や不安を抱く消費者も多いため、その解消に向けた方策を検討することは重要な課題となっています。

また、本学科学生・教員による国際交流・共同研究もますます充実してきております（写真）。今年度からグローバル人材育成“ENGINE”に取り組んでいる本学において、本学科の果たす役割は重要なものになって来るものと自負しております。

皆様方におかれましては、これまで同様、本学科への手厚い支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



フィリピン大学での報告会（修士2年中村さん、前列左端）



インドネシア・パーム油の調査（小林先生と石田先生）

園芸産業創発学プログラムの近況

園芸学科 大川 克哉

次世代の園芸産業の発展・展開を担うプロフェッショナル人材の育成を目的に、園芸学科および食料資源経済学科横断型の特別教育プログラムである「園芸産業創発学プログラム」は、今年度で5年目を迎え、今年3月には初めての卒業生4名を出しました。現在、このプログラムを4年生3名（園芸学科2名、食料資源経済学科1名）、3年生4名（園芸学科）、2年生4名（園芸学科）が履修しています。また今年4月には1年生5名（園芸学科3名、食料資源経済学科2名）が入学してきました。

この園芸産業創発学プログラムでは、高度な生産技術、優れたビジネス感覚およびグローバルな視点を高度な次元でバランスよく修得させることに特に力を入れています。そのために、大学入学後の早期から園芸生産現場や専門分野に触れさせるとともに、実践的で専門性の高い演習やインターンシップなどの特別科目を設けています。1年次では、1泊2日の先進的園芸産地視察や流通現場の見学を行っています。

この先進地視察を昨年9月には、埼玉および群馬県で行い、埼玉県農業技術研究センターでは柴崎氏（園平26年卒）に、嬭恋村のキャベツ生産地では黒岩氏（園平24年卒）に、またカネコ種苗株式会社では林氏（園昭58年卒）にご案内およびご説明いただきました。生産や流通現場等でのインターンシップについては、学年によりカリキュラムが若干異なりますが、2年生には2週間、3年生には1ヶ月間、4年生には卒論と兼ねて約6ヶ月間行うことを課しています。昨年度は、これらのインターンシップを大規模施設園芸法人（千葉県、北海道）、果樹園芸生産法人（千葉県）、花卉生産・小売法人（神奈川県、東京都）等で行っています。特に6ヶ月間のインターンシップを行ってきた学生は、ビジネスとしての園芸産業を考える力を着実に向上させています。

なお、この園芸産業創発学プログラムの教育には、先進地見学やインターンシップ、また関連学部科目の「園芸ビジネス論」等において、多くの戸定会会員の皆様にご協力いただいております。この場を借りて厚く御礼を申し上げます。



群馬県嬭恋村のキャベツ産地を視察

環境健康フィールド科学センターの近況

環境健康フィールド科学センター長/副理事（柏の葉キャンパス） 高垣 美智子

1991年に柏の葉に移転した園芸学部附属農場が、2003年に全学の教育研究機関として改組されてから17年が経過しました。2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、7月いっぱい学生のカンパス立ち入りが制限され、農場実習も8月までは実施を見合わせるという事態になっています。

2005年に開業した、つくばエクスプレス「柏の葉キャンパス駅」周辺の施設整備もほぼ完成し、旧附属農場から割譲された、東京大学柏キャンパスⅡには経済産業省・産業総合研究所に続き、東京大学がAIセンターを建設中です。周辺環境が激変する中、長年にわたる柏市等の強い要望により、2023年にはキャンパス内を「学園の道」が開通する計画が進んでいます。道の開通により、キャンパスが南北に分断されることから、キャンパスの将来計画も大きく影響を受けることとなりました。

2019年度より「多様な農福連携に貢献できる人材育成プログラム」を履修証明プログラムとして開始しました。ウイルス感染拡大の影響で、今年度の計画実施が遅れていますが、引き続き、プログラムの充実をはかっていく計画です。

薬用植物に関しては、センター内に設立された「一社法人日本薬用機能性植物推進機構」と連携して、薬用植物・機能性植物の種苗開発・供給を行っています。

農林水産省の植物工場拠点事業では、今年度、新しい「人工光型植物工場」が竣工し、活動を開始する予定です。国内の他大学や海外の協定校からの学生を対象とした植物工場や施設園芸に関わる研修プログラムも継続して実施しています。

昨年度末に、附属農場の柏移転から全学センターの環境園芸農場への変更、さらに園芸別科の廃止と、組織が大きく変わる中で長年にわたり技術教育を担当いただいた、技術専門員の村田義宏様が定年退職されました。ご貢献に感謝申し上げます。また、昨年度7月には、自然セラピープロジェクトでご活躍いただきました、宋チョロン先生が韓国・公州大学校に異動され、後任として10月1日より池井晴美先生が森林総合研究所より着任されました。



履修証明プログラムでの施設見学の様子

栃木県支部の活動

栃木県支部長 **野中 英夫** (生管昭46)

令和元年7月6日(土)、宇都宮市「ニューみくら」において、令和最初の総会・特別講演会を開催しました。戸定会本部の賀来副会長、園芸学部松岡教授を来賓としてお迎えし、総勢28名の参加となりました。また、今回は博士後期課程に在籍する寺田さんとエルミロヴァさんが在校生として初めて参加され、懇親会を通じて会員との繋がりも生まれました。

総会の前に開催した特別講演会では、会員の金鋪良昭氏(園経平20卒)から「ふんばる農業高校」と題し、県内で農業学科のある7つの農業関係高校の特徴的な活動についてご紹介頂きました。来春に高校受験を控えたお子さんを持つ会員から質問もでるなど有意義な時間を過ごすことが出来ました。

また、昨年10月26日には現地研修会を開催しました。10名参加のもと、シクラメンを中心とした花き経営を営む「竹原園芸」(宇都宮市、平20卒)や息子さんが園芸学部在学中の「荒牧りんご園」(宇都宮市)を視察するとともに、大谷石の採掘場跡にある「大谷資料館」を見学するなど、研鑽と会員同士の交流を深めました。



栃木県支部総会(令和元年7月6日)

埼玉県支部総会

埼玉県支部長 **時田 勉** (園昭32)

戸定会員としても、齢を重ねるにつれて、旧友との出会いを頻繁にし、更に延寿の願望が強くなるように思われます。今年の総会は、その願いを汲んで、武蔵一宮氷川神社に健康



延寿の参拝と造幣局さいたま支局博物館見学に、例年より多数の26名の会員が参加して、令和元年6月9日(日)、さいたま新都心にある「ラフレさいたま」の4階「櫓の間」で開催されました。学部より園芸学研究科長小林達明先生、戸定会より加藤一郎会長、齋藤京子副会長が来賓として出席、それぞれ御挨拶を、加藤会長からは、アカデミック・リンク松戸基金の応募状況と更なる協力を求めるお話がありました。また現役学生の松本祐太郎君(生物環境気象学)、平英敏君(土壌学)が特別参加をしての学部生活現状のレポートと挨拶は同窓生同士にとっては、数十年前の我が身を照合して懐旧の思い深く、誠に良い企画でありました。

講演は、この4月まで埼玉県農林部長であった篠崎豊さん(園昭58)による「埼玉の農園芸生産」で、躍進目ざましい埼玉の野菜花き生産の現状と、それを支える千葉大園芸学部同窓の力強さを語りました。

総会の後、会場を「雪月花」に移して、記念撮影の後、千葉大学名誉教授の斉藤修先生(埼玉戸定会員、斉藤京子副会長の御主人)が特別参加して、乾杯の音頭を取り、和やかで賑やかな懇親の宴が続き、来年の再会を約して散会しました。

山形県支部の活動

山形県支部幹事長 **鈴木 光則** (生物平9)

戸定会山形県支部では令和元年12月7日に山形市で総会を開催し、環境健康フィールド科学センターの小原均先生をお迎えし14名の支部会員が集いました。総会では、小原先生から園芸学部の近況報告として、学科編成、留学、奨学金等の様々な情報を提供して頂きました。その後、支部会員の鈴木洋氏(園昭57)より「2月11日私の誕生日」と題して講演を頂き、ご自身の誕生日である建国記念日に関するお話からこれまでの様々な経験談を紹介して頂きました。

また、令和元年度は秋季事業として前年度に雨で中止となった水晶山登山が行われました。水晶山(標高668m)は気軽に散策が楽しめる山であり、参加者は荒生孝氏(化昭47)からキノコについての様々な説明を受けて、キノコ狩りを楽しみながら登頂することができました。山頂では香り豊かな淹れ立てのコーヒーを皆で味わい、眼下に広がる山形盆地と遠くの山々を眺めてゆったりとしたひと時



山形県支部総会



水晶山登山

を過ごしました。

今年度はコロナの影響で大変ですが、今後も支部会員が親睦を深められるように努めてまいります。

福岡県支部総会報告

福岡県支部長 **濱岡 治** (生管昭 50)

昨年度の総会は筑後地方支部の担当で、当地域には実際に農業に携わっている会員が多いこともあり、支部としては初めての試みとして会員の農園を訪問することにしました。

地方支部長の井上永太郎（生管昭 50）さんと電話やメールでやり取りしながら計画を立て、実施日は11月10日、訪問先は3カ所でラディッシュ栽培の「カラーリングファーム」植原憲一（園経平 15）、植木生産の「金華園」二又朋則（生物平 16）の若手2人と地方支部長である柿栽培の「井上果樹園」ですんなり決まりましたが、一番問題なのは移動手段で、今回の成功はマイクロバスを安価に手配できたことでした。JRと私鉄の最寄り駅に10時半に集合してもらいマイクロバスで各農園を訪問、一か所1時間（説明30分、圃場見学30分）移動時間30分、最後の井上果樹園で総会とオーガニック野菜でのバーベキューで懇親を深めました。また植原さんから同社のラディッシュ酢漬けと井上果樹園のマンゴーのような味の柿をお土産に頂きました。

当日は福岡マラソンと重なり福岡市役所の会員が参加できず、参加者は19名にとどまりましたが本部からは賀来副会長、大分県支部からも伊東さんが参加してくださいました。

3年前の「アクロス福岡」での会員4名による講演会でもそうであったように、今回も参加した全員が本当に来て良かったと言ってくれました。支部活動を活性化して行くためには単なる懇親会だけでなく、このような会員の活躍の紹介と情報提供の場が必要と痛感しました（詳しくは戸定会のホームページをご覧ください）。



東京都支部総会報告

東京都支部長 **矢田部 正照** (総農昭 39)

東京都の支部総会は、昨年に続き会場をJR四ツ谷駅麹町口に隣接して建つ「主婦会館」で開催しました。

令和元年と年号も改まった年でもあり、ラグビーの世界大会で世の中大変な盛り上がりで、気も心も新たに意気込んでいた総会でしたが、月末の開催であったことからか、意に反して参加者が20名弱とやや寂しい総会でした。

来賓にはご多忙の中、小林達明研究科長にご出席を賜り、最

近の学内の動静や学部図書館の改築に伴うSEEDS基金への寄付、戸定会への寄付等について依頼されました。

講演会では、母校が今年度入学生から新たに取り組む海外留学の義務化に関連して、海外体験豊富で現在も活躍されているJICA勤務の審議役次長の永友紀章氏を講師に依頼しグローバル化時代の国際協力について講演をお願いしました。永友氏は、海外での生活、留学をするにあたっての指針ともなり得る日本人の誇れるものは、技術者も政府関係者も公務員も現地人と全員一緒に汗を流すことであり、更にプロジェクト方式の導入では、両国民担当者全員の参加が評価されていると、今後の海外での活躍する日本国民の指針を述べられました。

懇親会では、最年長昭和27年卒から平成卒の若い会員までが集い、定刻をオーバーするほど和気藹々と盛り上がりました。

長野県支部総会報告

長野県支部 **三田 毅** (環緑昭 61)

令和元年10月12日、伊豆半島に上陸した令和元年東日本台風により、長野県でも千曲川流域を中心に大きな被害が発生しました。このような中、事務局では通知済みの「11月11日長野市での開催」の支部総会について、予定していた講師をはじめとする会員も被災されていたこと等から、開催の是非に非常に迷いましたが、こういう時こそ情報交換、連携、協力が重要ではないかということで開催に踏み切りました。

例年に比べ少ない出席者9名の中、本部からは長野市のご実家が被災という状況にも拘らず小原均教授にご臨席賜り、アカデミック・リンク松戸など最近の大学の状況についてご説明をいただきました。

総会後、ピンチヒッター講師の塚原支部長から9月に中国に招かれ訪問された時の状況についてご報告をいただきました。中国の農業情勢の実態について理解することができました。

懇親会では、各自の近況報告等により大いに盛り上がりました。



福島県支部総会報告

福島県支部長 **安斎 正典** (園昭 47)

福島県支部は会員が130余名、支部総会は毎年県内の温泉地で1泊2日で開催しています。当日は、まず研修会を実施し、引き続き総会に移行します。なお、去年は日帰りの方もおりましたので、出席された本部役員の齋藤京子副会長より学部の近況報告をいただきました。また、最も楽しみな懇

親会の席では、乾杯後に出席者全員から近況報告をいただき、各人の自慢話に対して活発な質問攻め等もあり、賑やかなうちに1次会を閉め、引き続き2次会を楽しみました。

翌日は視察研修を実施し、昨年の視察先は園芸学部バックアップを得て成果を上げつつあるJA東西しらかわの植物工場を見学し、同JA経営の直売所併設レストランで昼食を共にした後解散となりました。一昨年は別科OBの双福園芸の見学でした。

なお、今年は新型コロナウイルス感染防止の観点から、例年通り支部総会を開催できるか否か、検討中です。

新潟県支部会の活動報告

新潟県支部長 齋藤 健治 (造昭50)

新潟県支部では、隔年で開催している、総会・講演・見学・交流等が主な活動になります。令和元年の会は、7月13日(土)、新潟市において開催、会員21名(うち女性会員6名)が参加しました。県外からは田上町(出身)でブドウを栽培、神奈川県に在住の小山さんが参加しました。本部からは加藤会長をお招きし、新図書館建設の進捗や協力、グローバル人材育成など園芸学部の最近の様子をお話していただきました。

講演会は、「関矢先輩の造園図面と作庭の要点」と題し、支部長が行いました。内容は、(故)関矢定一先輩(旧広神村出身、大正12年3月に千葉県立高等園芸学校卒業)が、丸ペンを使い、個性的な線で描いた造園図面70点余りを、スライドにて紹介したものです。参加者からは「フリーハンドで描かれた、なつかしい青焼の図面(絵)は、すばらしい芸術作品です」との感想がありました。本部事務局からは先輩在校当時の「校友会々報」等を借用、参考としました。お手数をおかけし、ありがとうございました。

その後の懇親会では、出席者全員から近況報告があり、相互の情報交換、親睦を図り、会員同士和やかな時間を過ごすことができました。コロナの状況にもよりますが、次回は令和3年開催予定です。在校生、県出身者へも呼びかけをします。新たな出会い、交流ができればと思います。



新潟県支部総会 倉重祐二(園専昭62)撮影

皆様のご支援に感謝します

千葉県支部長 長嶋 孝志 (農化昭49)

令和元年9月9日に千葉県に上陸した台風15号(令和元年房総半島台風)によって、農業施設等が約478億4,100万円、農作物等が約109億3,400万円など、合計で約664億9,900万円と過去最大の農林水産被害が発生しました。

私を含めて、多くの会員が被災したことから、10月12日に予定していた総会を急遽中止しました。出席を予定していた方々にはご迷惑をおかけしましたが、台風19号(令和元年東日本台風)が通過したので、結果的には良かったのかも知れません。今回の災害に当たって、本部からお見舞いがあり、また多くの方から激励をいただきました。改めて、感謝いたします。

新型コロナウイルスの感染状況にもよりますが、今年は総会を開催して、元気な千葉県支部をお見せしたいと思います。

静岡県支部だより

静岡県支部長 大谷 徳生 (生管昭54)

静岡県支部では、これまで8月に総会と研修会を開催してきましたが、会員から開催時期を9月以降にしてはどうかとの意見があり、令和元年度は11月23日(土)に静岡市内のホテルにて開催しました。

夏の猛暑もなく、台風も来ない時期であり、当日は天候にも恵まれました。今回はこれまでより10名以上多い、34名が出席しました。このうち平成の卒業生が13名と若い方の出席が多く、女性も5名出席しました。最高齢は昭和24年卒、最も若い方は平成31年卒でした。これも事務局の声掛けのおかげと感謝しています。来年は、今回を超える会員の出席を目指していきます。

総会では、会計報告と役員改選が行われました。役員は9名中7名が交代し若返りましたが、支部長は引き続き大谷がもう1期務めることとなりました。来賓には、戸定会本部の丸尾氏に御臨席を賜り、園芸学部の近況について御紹介いただきました。

総会に引き続き行われた研修会では、農林水産省大臣官房参事官の秋葉一彦氏(平成2年園芸卒)を講師に迎え、「新たなイノベーションと今後の農業経営について」をテーマに、ドローンやロボットなど最先端の農業技術の動向を、



懇親会

わかりやすく教えていただきました。

懇親会では、会員同士の交流を深め、懇親会の最後には、恒例となった「山男の歌」を参加者全員で合唱し、本年度の総会は終了しました。

鶴田志郎氏旭日単光章受賞おめでとうございます

熊本県支部長 **五嶋 映司** (園昭 41)

永年、熊本支部長を務められた鶴田志郎氏（1964 年・昭和 39 年園芸学科卒）が 2020 年春の叙勲で旭日単光章を受賞されました。氏は、父親達が、すでに全国ブランドに育て上げていた「田浦甘夏」の生産のため卒業と同時に就農されました。

柑橘栽培が急速に発展すると同時に、化学肥料や除草剤の多用による、ミカンの味の低下に危機感を持ち、他の果樹生産でも有機栽培により、良品生産が行われている事例を参考に、1975 年、南九州の生産者有志を集め、有機農業を志す生産者の組織として、サンキストに模して「マルタ柑橘生産組合」を立ち上げられました。

化学肥料・農業使用を中心とする農業技術体系中心の時代、大変な苦労の中、翌年の 1976 年には東京事務所も開設され、大学の研究室との協同で、農業に於ける微生物の役割を理論づけて、生産者のネットワークを全国に広げられました。「モグラ堆肥」を先頭に、生産者との連携で、化学肥料を使わなくても栽培できる有機質資材を完成させ、マルタの産地を全国に広げられました。

以来 45 年、「株式会社マルタ」となり、1700 名を超える生産者と 82.5 億円の企業へと発展させられました。今回の最大の喜びは、有機農業が評価され、環境保全と、持続可能な農業の実現への一歩が行政の中で、認められたことではないかと、思います。



旭日単光章を受賞された鶴田志郎氏

環境緑地学科第 7 期・第 8 期合同クラス会報告 @ 名古屋

藤井 辰則 (環緑昭 59)・外木 秀明 (環緑昭 60)

令和 2 年 2 月 1 日 (土)、表記同窓会を名古屋にて参加者 25 名で開催致しましたので、ご報告させていただきます。

今回の企画の目玉は、名古屋の誇る施設見学。名古屋の歴史を感じる企画（環緑卒業生向け文化財巡り）でした。

名古屋城天守閣は、木曾檜の最高級品を全てに用い、重要文化財である障壁画の完全復元模写、金箔をふんだんに用いた全て形状の異なる天井、欄間、飾金具などで装飾された書院造の玄関、表書院、対面所、上洛殿などに圧倒されました。

東山動植物園では、完成したゾウジウム（アジアゾウ舎）、自然の姿を見る生態展示と動物本来の動きを見る行動展示を合わせ、ふるさと“スリランカ”を体感できる施設を見学。隣接の植物園では、工事中的重要文化財温室、本温室をスカイビュートレイン駅の高台ホームから工事外観を見学しました。日本の公共温室の最古、わが国初期の本格的鉄骨造温室として、電気溶接による美しいラインを持ち建築技術史上高い価値を持つとされる建物でした。

懇親会は、サイアムガーデン（登録有形文化財）タイ料理レストランで行いました。この建物は、タイの領事館にもなった、名古屋に日泰寺（宗派に属さない全仏教徒のためのお寺。タイ国から拝受したお釈迦様の真骨を祀る）があるようにタイとの所縁の深い建造物です。各自の近況報告があり、十分に飲み、語り合いました。

今回は、2021 年 2 月 20 日 @ 川越です。川越の次は、鳥取です。今回、名古屋は満喫出来ましたか？ 今回の企画・運営を担当した名古屋在住の幹事の皆様（堀田様、江口様、吉田（横手）様）、誠にありがとうございました。

最後に、環緑 7 期・8 期合同幹事(?)より一言。今回から、グループラインに案内することになりました。連絡できなかった皆様、誠に申し訳ございませんでした。

この機会に、グループライン登録希望者は、外木のメールアドレス htonogi@yahoo.co.jp まで連絡ください。本稿を読まれた、戸定会の皆様も、是非ともお試しく下さい。



令和2年度 戸定会役員

令和2年7月1日現在（敬称略・順不同） ★前年総会以降新任、◎学部連携委員

名誉会長（研究科長）		★◎松岡延浩				
相談役		伊東 正				
監事		伊能重憲 福岡秀実				
常任理事	会長	◎加藤一郎				
	副会長	◎賀来宏和	◎齋藤京子	(学内)		
	常任理事	東京	矢田部正照	末松茂孝	中島 宏	濱田 豊
			柳 久	住吉泰男		◎坂内善次郎
		千葉	長嶋孝志	◎金子文宜	君島次男	齊藤 威
			和田昭通			藤家 梓
		埼玉	時田 勉	奈良井武	◎前田敏之	松丸好次
			村井千里	吉澤祥匡		間仁田勝
		神奈川	相場 崇	◎小山義訓	棚橋園成	山田康博
		茨城	内藤 栄	小竹 節	鈴木 栄	◎高栖 敬
			長岡徳樹	額賀 敏		寺田 誠
		学内	(庶務)	梅木 清	★◎宇佐見俊行	
			(会計)	彦坂晶子	★小原 均	
			(会報・名簿)	小林弘明	相馬亜希子	霜田亮祐
			(広報・HP)	◎古谷勝則		淨閑正史
		学術振興委員会	(委員長)	◎天知誠吾	椎名武夫	百原 新
				★吉田義明	★三吉一光	(相談役) 渡邊幸雄
理事	支部	支部長	理事			
	北海道	石村寛人	木村 篤	橋本雅之	阿部克巳	土谷美紀
	青森	若宮圭一				
	岩手	佐藤 明	山口貴之			
	宮城	篠崎 淳	遠藤 進	近藤 寛	齋藤 健	
	秋田	伊藤博之	大隅専一	山下光弘		
	山形	小笠原和博	沖田政明	廣部公子	加藤久雄	
	福島	安斎正典	久保木慶二	草野忠次	鈴木安和	菱沼 勇
			早福 晃	金成理恵子		
	茨城	内藤 栄	岡田 勉	岡田晴雄	田宮 賢	郡司光一
			鶴長文正	中野一正	田崎 稔	後藤詮司
			矢口達弥	信田菊江	渡邊朝治	連沼俊男
	栃木	野中英夫	平石厚夫	田中敏夫	小池 毅	渡辺幸夫
			田邊千知	寶示戸寿弘	★蓬田 武	
	群馬	白石俊昌	木村光一	酒井 宏	根岸 始	村岡邦三
			木村康夫	小倉愉利子		
	埼玉	時田 勉	岩崎桂三	木口恒夫	野原 宏	星井静一
			真下洋二	鈴木邦彦	長谷川勲	細井民興
	千葉	長嶋孝志	秋葉利雄	石田和也	落合哲平	奥倉 努
			甲田暢男	越川浩樹	鈴木 孝	上甲震太郎
			永野 修	富堅俊彦	中村早苗	南雲一夫
			松丸恒夫	横山雅亮	湯浅英明	小滝秀策
	東京	矢田部正照	加藤正明	木村栄一	小寺孝治	奥倉 努
			外木秀明	馬場 勝	清水政雄	上甲震太郎
			町田 誠	山下容子	平澤貴弘	南雲一夫
	神奈川	相場 崇	今関三貴也	鈴木 貴	松本孝一	奥倉 努
	新潟	齋藤健治	倉重祐二	森山 勉	和田祥子	小田切克治
	富山	西尾 正				安 健夫
	石川	安田公平				
	福井	北倉芳忠	小林恭一			
	山梨	植原宣紘	山本賢治	今井吉之助	岡 實	
	長野	塚原一幸	北原千歳	金子能呼	杉山利広	高木幸一郎
			西村清利	萩原 学	三田 毅	中山正男
	岐阜	成瀬秀博				
	静岡	大谷徳生	石川健一	★小澤俊幸	★岡村努	★藤浪正康
			★吉川公規	★佐原宏康	★永田博之	★澤野由明
	愛知	寺西 健	梶野保光	原 幹博		
	三重	堀川義昭	田中貞朗			
	滋賀		江見和純			
	京都					
	大阪	中西広樹	仲村 啓	當内 匡	松原秀也	
	兵庫	坂田正史	大西 潤	原田 充	広脇 淳	
	奈良	岩本和彦				
	和歌山	鈴木惣祿				
	鳥取/島根					
	岡山	加藤 泉	難波久一	山田貞宜	河田育康	
	広島	真宅成光	立川真成			
	山口	石光照彦	多々良健司			
	徳島	中野一雄				
	香川	安藤昭則				

理事	愛媛	影浦章次					
	高知	楠瀬武司	高野恵子				
	福岡	濱岡 治	井上永太郎	藤井清昭	宮本信太郎		
	佐賀	久保和則					
	長崎	浜岸利昭					
	熊本	五嶋映司	鶴田志郎	清住 昇	坂口信夫		
	大分	志手 博	伊東 壮				
	宮崎	河野喜幸	押川裕文	中武卓博			
	鹿児島	城戸清志					
沖縄	花城良広						
学内理事		秋田典子	近江慶光	後藤英司	章 俊華	中村郁郎	三島孔明
◎学部連携委員		井川智子	大川克哉	◎小林達明	高垣美智子	西田芳弘	三谷 徹
		池邊このみ	小川幸春	近藤 悟	高橋輝昌	野田勝二	八島未和
		石田貴士	加藤 顕	齋藤隆徳	★竹内智子	野村昌史	柳井重人
		磯田昭弘	菊池真司	坂本一憲	長 泰行	華岡光正	矢野佑樹
		犬伏和之	木下 剛	櫻井清一	塚越 覚	平井 静	★吉田英生
		岩崎 寛	◎栗原伸一	佐々英徳	出口亜由美	本條 毅	渡辺 均
		梅木 清	◎國分 尚	穴戸雅宏	土肥博史	丸尾 達	渡辺正巳
		江頭祐嘉合	児玉浩明	島田貴士	唐 常源	丸山敦史	渡辺洋一

※戸定会は各都道府県で活動しております。支部連絡先につきましては、戸定会事務局へお問い合わせください。

令和2年度 戸定会理事会総会報告

今年度は新型コロナウイルス感染拡大に伴い千葉大学では、感染症への対応として、学生への入構禁止、教職員への原則自宅待機が通知され、戸定ヶ丘ホール・戸定会事務局の使用も困難を極めている状況です。

戸定会では、学内理事会、常任理事会及び理事会総会をすべて、初めての書面開催となりました。

なお、議案の議決は、戸定会会則第15条及び第16条の趣旨を踏まえ、書面表決書のうち、賛成が3分の2以上の承認により可決されました。その結果についてご報告させていただきます。

- 日 時：令和2年6月13日
形 態：書面開催
議 案：
- 第1号議案 令和元年度戸定会会務・事業報告及び戸定学術振興委員会事業報告
賛成 162 票 反対 0 票 無効 0 票
- 第2号議案 令和元年度戸定会会計決算報告及び戸定学術振興委員会会計決算報告
賛成 162 票 反対 0 票 無効 0 票
- 第3号議案 令和元年度戸定会及び戸定学術振興委員会会計監査報告
賛成 162 票 反対 0 票 無効 0 票
- 第4号議案 役員改選案
賛成 162 票 反対 0 票 無効 0 票
- 第5号議案 令和2年度戸定会会務・事業計画案及び戸定学術振興委員会事業計画案
賛成 162 票 反対 0 票 無効 0 票
- 第6号議案 令和2年度戸定会会計予算案及び戸定学術振興委員会会計予算案
賛成 162 票 反対 0 票 無効 0 票

令和元年度支部総会開催及び本部役員の出席

・各支部会への本部役員の派遣：16 支部会へ派遣

開催日	支部名	開催場所	派遣役員
令和元年 6月9日	埼玉県支部	さいたま市 ラフレさいたま / 櫛の間	加藤 一郎（会長） 小林 達明（研究科長）
令和元年 6月22日 ～23日	福島県支部	塙町 湯遊ランドはなわ	齋藤 京子（副会長）
令和元年 7月6日	栃木県支部	宇都宮市 ニューみくら	賀来 宏和（副会長） 松岡 延浩（学内常任理事）
令和元年 7月13日	新潟県支部	新潟市 万代市民会館	加藤 一郎（会長）
令和元年 7月13日	茨城県支部	牛久市 細谷造園研修室	小原 均（学内副会長） 小林 達明（研究科長）
令和元年 7月27日	東京都支部	千代田区 プラザエフ主婦会館	小林 達明（研究科長）

開催日	支部名	開催場所	派遣役員
令和元年 9月28日	神奈川県支部	横浜市 里山ガーデン	賀来 宏和（副会長）
令和元年 11月9日	長野県支部	長野市 宴席 油や	小原 均（学内副会長）
令和元年 11月10日	福岡県支部	久留米市	賀来 宏和（副会長）
令和元年 11月16日	大分県支部	大分市 空海	賀来 宏和（副会長）
令和元年 11月23日	静岡県支部	静岡市 ホテルシティオ 静岡	丸尾 達（学内理事）
令和元年 11月24日	群馬県支部	前橋市 前橋テルサ	齋藤 京子（副会長） 櫻井 清一（学内理事）
令和元年 12月7日	山形県支部	山形市 ホテル NEW 最上	小原 均（学内副会長）
令和2年 1月11日	茨城南支部	取手市 つきじ植村	加藤 一郎（会長）
令和2年 1月15日 1月16日	富山県支部 石川県支部	富山市 いちいちつう 金沢市 新橋こうや	加藤 一郎（会長）

＊支部総会未開催の支部（富山県、石川県）に本部役員を派遣し、支部総会の実施、活動活性化について協議した。

支部活動活性化のお願い

戸定会副会長 賀来宏和（造昭 52）

日頃より、戸定会活動にご協力いただきありがとうございます。学生を含めてキャンパスへの入構が禁止となり、理事会総会等がすべて書面開催となり、総会実施の折には各支部の情報交換をすることができず、叶いませんでした。

学部と同窓会の連携がこれまで以上に重要であることは何度も発信させていただいておりますが、今後は在校生と卒業生の交流もさらに重要になろうかと思えます。支部活動については毎年、対象となる会員全員を対象として総会を開催する支部がある反面、活動が停止している支部もあります。

従来のように、葉書で支部会員全員を招集する総会方式には限界があり、すでに情報化時代に対応して、集まれる同窓生から気軽に交流会などを始めようという動きが各所にあります。本部としても、従来の支部総会にこだわらず、このような少人数の会合にも役員を派遣して交流を深めようとしています。LINEやフェイスブックで情報交換を行う支部など多様な方法がありますので、まずは是非気軽に会合を始めていただけると幸いです。

コロナの環境下、新しい暮らしの様式が求められる中で、出身地に戻りたいとする在校生も多く、充実した学生生活や就職活動を支えるためにも、是非とも支部活動の活性化をお願い致します。

会 員 訃 報

＜旧職員＞

(園昭 25) 板木 利隆
下藤 あい
高崎 康夫
(園昭 51) 北条 雅章
本間 啓
(園昭 35) 丸田 頼一
峰岸 茂
(化昭 22) 矢吹 稔
吉本 正

＜園芸学科＞

園昭 11 加藤 照孝
園昭 12 矢島 賢治
園昭 13 杉本 哲郎
園昭 15 大戸 順一
園昭 20 前野 卓三
園昭 22 梅原 重彦
園昭 23 大日方 隆二
園昭 24 市川 浩
園昭 24 鈴木 文夫

前号発行後、ご逝去の報をいただきました。

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略：令和 2 年 7 月末現在)

園昭 24 原田 勇

園昭 25 小熊 和男
園昭 25 佐久間 衛
園昭 28 武田 和男
園昭 29 黒上 九三郎
園昭 30 功刀 幹浩
園昭 31 石原 英雄
園昭 32 村松 弘之助
園昭 33 三次 康夫
園昭 34 小川 洋平
園昭 34 中村 桂吉
園昭 35 蔵岡 尚成
園昭 37 松井 義彦
園昭 39 中越 省逸
園昭 42 草処 義貴
園昭 47 戸田 耕二
園昭 55 吉田 建実
園昭 57 安喰 武夫
園昭 57 岡崎 誠司
園平 4 岡田 一秀

＜農芸化学科＞

化昭 20 樋口 哲夫
化昭 23 倉澤 昭夫
化昭 23 駒野 栄
化昭 23 野澤 勉
化昭 26 川村 三郎
化昭 30 栗山 敬三
化昭 33 青柳 昭和
化昭 38 戸張 健二
化昭 52 齋藤 美代子

＜造園学科＞

造昭 25 奥田 千蔵
造昭 25 高山 精司
造昭 26 直江 宏
造昭 28 齋藤 栄
造昭 33 松野 薫
造昭 34 森 達弥
造昭 38 原田 千之
造昭 38 間瀬 正行
造昭 52 伊藤 典雄

＜総合農学科＞

総農昭 29 中沢 養助
総農昭 29 柳楽 博
総農昭 31 伊藤 則行
総農昭 31 菊地 政雄
総農昭 32 並木 久男
総農昭 34 中島 喜守
総農昭 35 椿原 光寿
総農昭 38 佐藤 昭紀
総農昭 40 笛木 豊二

＜農業生産管理学科＞

生管昭 47 石井 保
生管昭 49 甘粕 裕美
生管昭 52 永田 文男

＜農業別科＞

農別昭 31 渡辺 修宏
農別昭 35 小川 弥夫
農別昭 39 木田 紀節

高崎康夫先生を偲んで

作物学研究室教授 磯田 昭弘

去る 2019 年 10 月 13 日、高崎康夫先生が逝去されました。享年 84 歳でした。

高崎先生は 1960 年北海道大学農学部を卒業後、同大農学部助手を経て 1967 年千葉大学園芸学部助手として赴任されました。その後、園芸学部長、附属農場長を歴任され、園芸学部の発展に寄与されてきました。研究においては、イネ栽培種の 1 年生と多年性の詳細な比較研究ほか多数の優れた成果を残されました。それらの功績により、2015 年に瑞宝章を叙勲されています。

先生のお人柄は温厚なそしておしゃれな紳士そのもので、多くの学生から慕われていました。また、先生はお酒が好きで、学生、先生方と一緒に楽しい酒席を過ごした思い出が数多くあります。今、先生と一献交える機会をなくした寂寥感が募ります。ご冥福をお祈りいたします。

板木利隆先輩を偲んで

千葉大学名誉教授 伊東 正 (園昭 34)

板木利隆さんは令和元年 10 月 2 日、中咽頭がんのため、90 歳でご逝去されました。

千葉農専園芸科を卒業後、蔬菜園芸学・藤井研究室の助手として勤務。教員在籍 4 年強で、神奈川農試園芸分場技師として転職。試験場時代は、環境制御技術、省エネ技術、養液栽培等の分野で新技術開発・普及に尽力し、さらに、

神奈川総農研所長を歴任後、全農農業技術センター技術主幹として、果菜類の幼苗接ぎ木技術、全農式幼苗接ぎ木生産システムの開発・普及を行い、昭和・平成を通して野菜園芸産業の飛躍的発展に多大な貢献をされました。

また、千葉大、東大、茨城県農大の非常勤講師を務める傍ら、著書も専門書 15 冊、家庭菜園指南書 20 余冊、他に野菜啓蒙書等で、総計 40 冊を出版し、これらの幾つかは農業技術書のベストセラーとなっています。理論と実技の両立を重んずる本校建学の精神を実践して登り詰めた先輩の偉業に敬意を表し、ご冥福をお祈りします。 合掌

矢吹稔先生を偲んで

千葉大学名誉教授 藤井 貴明 (化昭 40)

矢吹稔先生は 2019 年 11 月 17 日に、96 歳で逝去されました。

矢吹先生は、長い千葉大学の歴史の中で、千葉高等園芸学校に昭和 17 年 4 月に設置された農芸化学科の一期生として入学されました。在籍中に、健康をそこね、卒業は 3 期生 (昭和 22 年 4 月) となりましたが、以来、教員として昭和 63 年 3 月定年まで、41 年間の長きにわたり千葉大学に奉職なされてきました。先生は、若いころ大病を患い、その後も細身のお体で過ごされておられましたが、学生指導、研究や校務一般への積極的で丁寧な対応に、どうしてこんなにバイタリティーがあるのかと度々驚かされてきました。先生の主たる研究は、コウジ菌の酵素、キチン、キトサンの酵素等の基礎ならびに応用研究が中心でした。退職後も初代キチン・キトサン学会の会長や地元市の委員等につかれ貢献されてこられました。先生のご冥福をお祈りいたします。



卒業生だより

鈴木 卓 (緑地・環境学科 平成 13 年 3 月卒)

大学を卒業してから13年間は海外で生活しておりました。英国、米国のランドスケープデザイン事務所ですさまざまなプロジェクトを経験しました。6年前に帰国してからも、国内のほかに、中国、東南アジア、中東などで設計活動に取り組んでいます。ここ数年、講師として設計演習に呼んでいただいております、自身の学生時代を振り返りながらも、若い学生とデザインについて議論できるのは刺激的であり、大きな喜びです。



石井 隆 (園芸学科 平成 28 年 9 月卒)

私は現在電力業界の研究所で農業関係の研究をしています。研究所に勤めていますと学生時代には何とも思っていなかった多くの現場視察や、先生のお手伝い(や雑用)、研究が非常に貴重な経験であったと強く実感させられます。生きた知識を与えていただけたことに感謝しつつ、成果をもって先生方や諸先輩方、農業界に恩返しできるよう研究に精進してまいります。



小室 晴香 (応用生命科学科 平成 29 年 3 月卒)

応用生命科学科卒業の小室晴香と申します。大学では生物有機化学を学び、卒業後は化学メーカーである日油株式会社に入社しました。現在は界面活性剤の研究を行っており、製品の開発や改良に携わっています。製品は化粧品や電子部品、樹脂など幅広い分野で用いられており、多くの人々の生活に関わることができるため、やりがいを感じています。自分が開発した製品が世界中で使われることを目指して、今後も頑張りたいと思います。



小島 かおり (緑地環境学科 平成 31 年 3 月卒)

千葉市に造園職として入庁して2年目となり、今は公園の指定管理やマリンスタジアムの寄附金に関わる業務をしています。仕事では、大学の先輩方がたくさんいらっしゃるの、すごく頼りになりますし、雰囲気も良く、働きやすい職場です。仕事だけでなく、趣味のパドミントンも頻繁に職場の人とやったり、一緒に大会に出たりするので、オフの時も充実しています！是非マリン基金にご寄附をお待ちしております！



道林 広乃 (食料資源経済学科 平成 28 年 3 月卒)

昨年、人事異動で地元静岡に戻りました。東京や千葉ほどの便利さはありませんが、自然豊かで、のんびりとした毎日を過ごしています。仕事では、ソリューション営業部という部署で法人営業のフォローをしています。営業担当者以上の専門的な知識が求められるため日々勉強ですが、担当者や顧客に喜んでもらえることが一つの原動力となっています。



木野内 忠稔 (農芸化学科 平成 4 年 3 月卒)

旧農芸化学科・応用微生物学研究室を卒業後、東京大学大学院・農学生命科学研究科に進学しました。Ph.D. 取得後は自治医科大学・生化学講座を経て、2004 年より京都大学複合原子力科学研究所にてD- アミノ酸含有タンパク質の代謝や植物におけるホウ素の動態の研究をしていますが、2011 年の東日本大震災以降、微生物による環境浄化法(バイオレメディエーション)の開発にも従事しています。



森山 佳祐 (食料資源経済学科 平成 29 年 3 月卒)

地元の県職員として働き始めて4年目となります。行政の仕事は幅広く日々学ぶことが多いですが、それだけやりがいも感じています。仕事を通じて地元の魅力に気づくことができるのも一つの面白さです。休日は社会人チームでサッカーをしたり、学生時代の友人や職場の仲間と飲みに行ったりするのが息抜きになっています。



鈴木 志門 (園芸学科 平成 25 年 3 月卒)

2013年3月卒業の鈴木志門と申します。学生時代に園芸の魅力に触れ、現在は住友化学園芸にて、ガーデニング業界向けの農薬・肥料の普及活動に携わっております。最新のB.t.菌の力で病害抵抗性を誘導する薬は新しいアプローチの薬剤であり、普及活動にも力が入ります。先生方、OBOGの先輩方の活動には今でも励まされ、勉強させていただいております。私も微力ながら業界に貢献できるよう日々、努力していきたいです。



千葉大学園芸発のベンチャーがスタート

山口 利隆 (生管昭 46)

千葉大学と企業の共同研究成果として生まれた人工光型植物工場向けレタスの新しい品種の研究・開発、種子の生産・販売をするベンチャー企業、株式会社リーフ・ラボが2020年5月に設立されました。

近年、人工光型植物工場は、生産物の安全性に対する信頼感の深まり、季節や異常気候に左右されず安定的な計画生産が可能であることから急速に拡大してきています。しかし、人工光型植物工場の主要作物であるレタスは植物工場向けに育成された品種ではなく、最適品種の育成に対する要望が高まっています。

この事業によって育成された品種は人工光下での生育に優れ、生理障害が極めて少ないもので、生産者は単位重量当たりのコストを大幅に下げることが可能となります。リーフ・ラボは、それぞれの人工光型植物工場において異なる光源や栽培システムに最適な品種を育成又は選抜し顧客に提供する、いわば、世界で最初のテーラーメイド育種を行います。これには、季節に関係なく育種選抜をすることができる人工光型植物工場を活用します。

この事業に活用する技術は、植物工場、養液栽培、各種環境制御を含む幅広い基礎及び応用的な知見・技術体系をベースに構築したもので、千葉大学 学術研究・イノベーション推進機構、園芸学研究科、環境健康フィールド科学センター、及びNPO 植物工場研究会の支援のもとにスタートいたしました。

山口 利隆 千葉大学客員教授、NPO植物工場研究会理事長
丸尾 達 千葉大学大学院園芸学研究科教授、環境健康フィールド科学センター植物工場拠点リーダー、NPO 植物工場研究会副理事長

戸定会サポートクラブ活動報告～戸定祭2019へのサポート～

島村 宏之 (造昭 52)

昨年度の戸定会サポートクラブの活動は戸定祭運営に参加する学生が減少する中、8時半に集合し、テント設営のお手伝いから始まりました。地元町会でのテント設置に手慣れているメンバーもいるのでスムーズに立ち上げました。戸定祭が始まってからは入口での戸定会会員受付と100周年記念戸定ヶ丘ホールでの「戸定ガーデンカレッジ」の運営を手伝いました。午後からは美しく復元された「英国風景式庭園」でのガーデンカフェ「Cafe 風のガーデン」の応援を行いました。千葉大がサザコーヒーと共同開発した大学限定の『Panama Chiba Coffee』を飲みながら、松戸市戸定歴史館のサクソフォン野外コンサートが楽しめる贅沢な企画でした。最後にテントの撤去作業を行い、活動が終了しました。サポートクラブの皆様、お疲れ様でした。12月には「お疲れさま会」と称して戸定会と学部とのパートナーシップ会議及び学部連携委員会との合同懇親会を開催し、楽しく活動の幕を閉じることが出来ました。ありがとうございました。



ガーデンカフェ「Cafe 風のガーデン」

学生への就職支援のお願い

キャリアサポート室 キャリアアドバイザー 鈴木 弘孝

園芸学部キャリアサポート室で学生への就職支援を担当している鈴木です。

今年に入り、新型コロナウイルスによる未曾有の感染拡大がパンデミック現象を招来し、大学のキャンパスも学生への入構制限により、授業もオンラインで実施される等、キャンパスからは学生の姿が消えた状態が続いています。最近では、再び東京で1日の感染者数が200人を上回るなど、第二波の襲来が懸念されています。with コロナの「新しい生活様式」が求められ、リーマンショック以来の経済環境の悪化も取りざたされる中、学生の就職活動もオンラインによる企業説明会や面接が一般化するなど、昨年までとは大きく様相

も一変しました。今年度の内定状況も昨年度よりは低く推移している状況にある中、これからインターンシップや企業説明会など本格的な就職準備に入る22年卒学生にとりましても、今後さらに厳しい就職環境となることが予想されます。

戸定会の会員の皆様におかれましては、園芸学部生たちが学部での専門課程を基盤に様々な分野において「社会に有為な人材」として活躍いただけるように、行政や企業、各種団体等においてインターンシップや説明会、新規採用情報などの就職支援に関する情報がございましたら、是非ともキャリアサポート室までお寄せいただきたいと思います。新型コロナ禍の中にある学生たちの円滑な就職支援に対し、会員の皆様方の格別のご高配を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

お問い合わせ：E-mail: suzukih@chiba-u.jp
TEL: 047-308-8726 (木・金 勤務)

戸定ガーデンカレッジの開催

戸定会副会長 賀来 宏和 (造昭 52)・齋藤 京子 (園昭 51)

昨年の大学祭(戸定祭)では、卒業生と在校生の交流を深める目的で恒例のホームカミングデーが設けられました。戸定会では、その一環の事業として、大学祭に訪れる市民を対象とする「戸定ガーデンカレッジ」を開催いたしました。これは松戸ゆかりの卒業生の社会での活躍をご覧いただくとともに、地域と連携する学部の姿を発信するためです。11月3日、4日の2日間にわたり、3名の卒業生に講師を務めていただき、ご来場いただいた市民の皆さんからは、園芸学部にもふさわしい講演会で、さらに充実してほしいとのご意見もありました。

今年は、コロナの影響で大学祭の開催が中止となりました。

1時限目：11月3日午前

前恩賜上野動物園長で、日本パンダ保護協会会長の土居利光さん(造昭 50)をお迎えし「動物園の裏話～パンダ人気と動物飼育の人知れぬ工夫」と題して、動物園の裏方を含めて、貴重な画像とともに、人知れぬ動物飼育のお話を伺いました。土居さんは、動物それぞれに与える餌の話や個々の個性の違いなど、飼育する側も日々発見の連続という、まさに裏話を聞くことができました。パンダの話題ということで、市民の方々からの質問もあり、今までにはない講演会となりました。



2時限目：11月4日午前

(一社)日本ハンギングバスケット協会理事でNHK『趣味の園芸』講師も務められている山口まりさん(農別昭 49)に、「目線の花飾りでおもてなし～手軽に作るハンギングバスケット」と題して、お話しと実演をいただきました。はじめに、JR 柏駅周辺でゴミが増え夜中に飲酒をしている若者もいるなど街の風紀が乱れていたため、山口さんが市に提案し、ハンギングバスケットでフェンスに花を飾ったことで、ゴミが減り若者がたむろすることもなくなったというエピソードを紹介。その後、誰でも簡単に入手できるパンジーを使ったハンギングバスケットの作り方をわかりやすく実演。多くの参加者は花による美しい街づくりが人々のマナーを変える力があることに気づき、実技も学ぶことができた大満足の様子でした。



3時限目：11月4日午後

元千葉大学環境健康フィールド科学センター准教授の北条雅章さん(園昭 51)に、「市民農園で楽しむ野菜づくり」と題してお話を伺いました。園芸学科を卒業された後、園芸別科の教官として退官される2017年まで精力的に指導・研究にあたられ、野菜園芸の専門家として「野菜の上手な育て方大事典」も監修されて多くの書籍も執筆されています。

はじめに、農家の栽培と家庭菜園の栽培の違いを、完熟での収穫が可能、多品種の栽培が可能等と紹介し、「家庭菜園の醍醐味を味わってほしい、ご自分で勉強し工夫し実行する、野菜料理も工夫して」と家庭菜園に興味のある参加者にエールを贈られました。最後は参加者から次々と質問攻めとなり大盛況でした。



北条さんは、令和2年7月25日未明にご逝去されました。こちらの赤いトラクターに乗っている写真は、7月23日にご本人からメールでいただいたばかりでした。心からご冥福をお祈りいたします。

新型コロナウイルス感染症対策に係るご支援へのお礼

園芸学研究科長 松岡 延浩

感染症による学生の生活困窮、マスクなど資材の不足に対して多数の卒業生の方からご支援をいただきました。学生をはじめ教職員ともども、心よりお礼申し上げます。保護者からの送金の減少、アルバイトの雇止めなどによって一部学生の生活が困窮しております。また、メディア講義に対するインターネット環境が整っていない学生に対して通信機器などの支援が必要

となりました。園芸学研究科では、卒業生からいただいたご寄付をもとにして、千葉大学で一番早く35人の希望者全員に支援を行うことができました。感謝の言葉の一部が、本誌の国際交流の欄にも掲載されております。現在も、「新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急支援事業」を中心に、学生の支援を続けております。今後とも、ご協力よろしくお願いいたします。

庭園群の芝生管理 with コロナ

園芸学研究科長 松岡 延浩 (園昭 58)

現在、松戸キャンパスの庭園群の芝生の管理は 12 人の教員ボランティアによって行われています。従来、フランス式庭園の芝生の管理は戸定会庭園保存ボランティアの皆さんが、イタリア式庭園とイギリス風景式庭園の芝生の管理は山崎久志技術職員の指導の下、学生アルバイトが主として行ってきました。しかし、今年 4 月以降、新型コロナウイルス感染症対策のため、松戸キャンパスだけでなく千葉大学全キャンパスで入構規制が実施され、入構が必要な業務がある教職員、卒論、修論、博論に関わる学生、対面の授業に出席する学生しか、入構が許可されていません。これは、関係者が自宅から松戸キャンパスを往復する間に、ウイルスを人に感染させたり、させられたりするのを防ぐためです。その結果、長年フランス式庭園の芝生の手入れをしてくださっていた戸定会庭園保存ボランティアの皆さんにも入構をお断りせざるを得なくなりました。また、そのような状況下で管理を外注するのにも人道的に問題があるため、教員ボランティアで管理することとしました。



フランス式庭園での作業



イギリス風景式庭園での芝刈り作業

5 月 1 日、12 名の教員ボランティアが集まり、大川講師と山崎技術職員から動力芝刈機の扱い方などの説明を受けました。当日集まった教員のほとんどが、動力芝刈機の使用経験がなく、交代で運転の練習をしました。以後、1 班 4 名 3 班が交代で 1 週間から 2 週間に 1 回、庭園群の芝生管理をしています。

庭園保存ボランティアの方々からいつから入構できるのかというお問い合わせをいただいておりますが、キャンパスの入構規制が解かれるまでもう少しお待ちください。急ごしらえの教員ボランティアはつたないところは多々ございますが、その日が来るまで中継ぎをさせていただきます。

戸定会より寄付のお願い

今年も戸定会の重要な活動資源となっております。一口 1,000 円の寄付金をお願いすることになりました。戸定会への寄付は同封の郵便振込用紙でお願いいたします。

なお、今年も引き続き 20,000 円以上のご寄付をいただいた方には、昨年同様次のいずれかをお礼の品として贈呈いたします。

- ①環境健康フィールド科学センターで栽培育成したシクラメン (12 月上旬発送予定・寒冷地不可)
- ②環境健康フィールド科学センターで収穫された果樹のジャムと柏の葉産純粋ハチミツ及びパナマ千葉大コーヒーのセット
- ③環境健康フィールド科学センター沼田農場産のリンゴ ふじ (12 月上旬以降発送予定・1 月末まで発送可)
- ④守屋千葉大学名誉教授 (横綱審議委員会前委員長) のご実家守屋酒造の純米大吟醸と辛口純米酒のセット (オリジナルラベル) のいずれかをお選びいただけます。



沼田農場のリンゴの思い出 齋藤 京子 (園昭 51)

昨年 2019 年度から、戸定会へのご寄付の返礼品に「沼田農場のリンゴふじ」が初登場しました。早速懐かしい、沼田農場のリンゴを返礼品に選びました。私たち園芸学科の学生は沼田農場に落葉果樹の実習で行きました。着色作業と言って当時は板に並べた紅玉に水をかけたのに驚きました。実習が終わると芝生の上で夜中まで飲んだりしゃべったり、最後は、山男の歌の「子持ちの山は低くとも……」と皆で歌った楽しい思い出の農場です。今回何十年ぶりの沼田農場のリンゴは、蜜が入っていてとてもおいしかったです！これからも返礼品として楽しみです。

編集後記

今期も編集委員長を仰せつかりました。コロナ禍のもと教育面、研究面ともにこれまでにない経験をしております。このような状況の中、今回の会報が発行されました。困難が続く中でも、この会報を通じてこれまで以上に戸定会みなさまのつながりを確認することができれば幸いです。特集記事において、皆さまのご寄付により完成した、アカデミック・リンク松戸の利用状況と「緑のテラス」の整備状況について特集を組みました。ご感想、ご質問があればお寄せください。また、コロナ禍で経済的に困難な状況の学生へのご支援に厚く御礼申し上げます。

編集委員長 霜田亮祐 (緑地環境学科 准教授 / 緑環平 10)

表紙写真

撮影者：賀来宏和 (造昭 52)

2019 年 11 月 4 日イギリス風景式庭園でのガーデンコンサートの様子

戸定会ホームページ
(<https://tojokai.com>)

Facebook